伝え続ける

小川 末紘さん

おがわ　みひろ

優秀賞

中条中学校 3年

沖縄県渡嘉敷村。

私は、「日本ＰＴＡ国内研修事業ｉｎ渡嘉敷村」に参加しました。今から約三カ月前、三月下旬のことです。

渡嘉敷村は、沖縄本島から約三十キロメートル離れたところにあり、「ケラマブルー」と呼ばれる、とても透明度の高い海があります。そのため、ダイビングをして海を楽しむ人たちからすれば、天国の島として知られています。また、島の近くにザトウクジラが姿を見せ、ホエールウォッチングも楽しめるそうです。

そんな楽園で、私は、私が生きてきた十四年間で一番、驚いた経験をしました。

集団自決。この四文字の本当の意味を知ったのです。「アメリカ軍に殺されるなら、自ら死ぬ。」という考えで、一九四五年の三月二十八日、三〇〇人以上の住民が亡くなりました。

当時の様子を客観的に伝える資料として、一九四五年、四月二日、集団自決五日後のロサンゼルス・タイムスの朝刊が展示されてありました。

死体あるいは瀕死となった日本人で埋め尽くされていた。足の踏み場もないほどに、密集して人々が倒れていた。

三〇〇人以上というのも事実のようです。

次のような記述もありました。

ボロボロになった服を引き裂いた布はしで首を絞められている女性や子供が、少なくとも四十人はいた。聞こえてくる唯一の音は、怪我をしていながら死にきれない幼い子供達が発するものだった。

どんな気持ちで同じ家族、または同じ集落の住民の首を絞めたのでしょうか。死にきれない幼い子供は、誰に何を伝えたかったのでしょうか。胸が詰まります。これ以上の地獄絵図はないでしょう。

その集団自決跡地に行きました。七十九年前、ここで何があったかを想像すると、私も一緒に訪れた友達も、言葉を発することができませんでした。悲しみ、信じられなさ、幸せな自分、申し訳なさ、祈り……、一度にさまざまな思いが押し寄せ、息が苦しくなりました。

私は、この経験を通して、改めて戦争は絶対にしてはいけないということを実感しました。

私達が生まれたこの時代には、日本にとって戦争というものがあまり身近になくて、戦争がどれだけ残酷なものであり、どれだけ辛いものなのかを知っている人は、ほとんどいないと思います。私自身もそうです。実際に戦争を経験したことがないので、戦争の残酷さを知ることはできません。でも、それで終わりでいいのでしょうか。自分達が経験したことがないから、もう過去のことだからといって、戦争について考えることがなくなってしまってよいのでしょうか。私は絶対にそんなことがあってはいけないと思います。

このことに関係する、気になる動画をＳＮＳで見たことがあります。原子爆弾が落とされた日や、終戦記念日をインタビューしている動画です。

終戦記念日などの全ての質問に正しく答えられた人は、一人もいなかったのです。

このような現実が当たり前にならないようにするため、日本全体として、もっと戦争について触れる機会を増やしていくべきだと思います。

例えば、七月は、積極的に歴史や戦争についての話を読んだり、動画を見たりする月間にしてはどうでしょうか。学校でも、朝読書をしていますが、図書室から戦争関連の本を運び出して学級に置き、手に取りやすくするのです。

私はこれから生きていく中で、戦争についてもっともっと知っていきたいです。幸いなことに、私は八月上旬に、胎内市の事業で広島へ行くことができます。そういう機会をいただけてとてもうれしいです。「広島平和記念資料館」や「原爆ドーム」を体験できるのはとても貴重です。

できれば、そこで学んだことを二学期の生徒朝会で発表し、皆に関心を持ってもらいたいと思います。また、それで終わりにするのではなく、友達との日常会話で広島の経験を話題にしたり、世界各地で起きている戦争に関心をもったりしていきたいです。

将来、ＮＧＯ（非政府組織）のボランティアに参加するのもいい経験になると思います。そして、いつか戦争のない世界になることを願い続け、行動し続けていきます。

（原文のまま掲載しています。）